

# 新年を迎えて

## ノーベル賞に思う 先人の偉業



東京YMCA評議員会  
会長  
勝田 正佳

不安と緊張の続く世相の中で山中伸弥教授のノーベル賞の受賞は朗報でした。YMCAに関わる先人にも受賞者がいるのです。1901年に創設されたノーベル賞の最初の受賞者はアンリ・デュナン。彼が1863年に設立した国際赤十字によるものです。彼はその8年前に世界YMCA同盟の結合の基準となったパリ憲章の起草者の一人でした。ジュネーブYMCAの理事だったのです。

また、北米YMCA同盟の総

## 神に喜ばれる活動を

東京YMCA総理事  
廣田 光司



2011年8月に認可を受けた東京YMCAにほんご学院は2012年、各国の留学生を迎え、本格的に始動しました。東

タイによる福音書」20章27節。YMCAの使命と活動が世界的に評価を得ていることの証左といえます。

新年を迎えて目を世界に向けつつも、大震災による避難者への支援を継続し、且つ足下では地道に会員増強、ファンド・テ

は他にも多くの国際活動を行っています。10月にはソウル、台北、東京のYMCAの指導者がソウルに参集して協議会が開かれました。2年毎に3カ国持ち回りで開催されています。

世界125の国と地域にYMCAがあります。国や民族の間でどのような諍いがあることもYMCAは170年の歴史の中で市民同士が交流を続けてきました。これからも多くの友情を育んでいくでしょう。小さな国

## 法人間の連携を



東京YMCA法人  
学校理事長  
徳久 俊彦

新年おめでとうございます。皆様はどのような新年を迎えられたでしょうか。

このような中で、私達はどういうにそれぞれの役目を果たして行くべきでしょうか。

昨年、アメリカのオバマ大統領が行われ、日本もその例外ではありませんでした。ただ変化の兆しはあるものの、先行きは不透明のままであるように思われます。日本はその中で、戦前の日本に戻るような動きが懸念され、私達は否応なしに「政治」と向き合わざるを得なくな

さて、東京YMCAは公益法人となつて3年度目を迎えます。学校法人も共に一体となつて総合力を発揮出来るように努めねばなりません。そのため、毎月双方の理事代表と総理事・学院長が連絡会議を持ち、現状を互いに報告し、問題の共有と解決を図るよう努めております。江東幼稚園は江東YMCAと同じ場所所創立以来相互連携を図っております。東雲ではグラウンチャ東雲と「こども園」の連携はもろろのこと東雲ファミ

りそうです。このような中で、私達はどういうにそれぞれの役目を果たして行くべきでしょうか。

政治の貧困を嘆く間にも、世の中に見捨てられる人々が出て来ます。社会の構造を根本的に変える努力は欠かせませんが、反面助けを求める人々に先手を差し伸べることが必要です。その両面を役割分担・相互連携を上手にやりながら進めることが大事ではないかと私は思います。

## 高校生13人 石巻でボランティア



軽食や子どもの遊び、お茶っこと6種類のコーナーを、13人で考えて開催した。

## 「わいわい広場」に 250人来場

「自分たちは何が出来るか、どういう風に声を掛けたいか、どう考えたけれど、多くの人が来て、ありがたうと言ってもらえたのが、すごく嬉しかったです。」

石巻から東京へ帰るバスの中、ひとりの高校生が話していました。

11月23日から25日の3日間、東京YMCAとしては初めての高校生を対象とした石巻でのボランティア活動を行いました。募集開始から実施まであまり時間のない中、ホームページやボランティアセンター、学校の掲示板に貼り出された募集要項を見て「自分の出来る何かをしたい」と13人の高校生が集まりました。

実施前の事前ミーティングでは、3日間過ごす仲間との関係を作り、「ボランティア」について、そして「自分たちは何が出来るか？」考える時間を持ちました。吹奏楽部の2人から「クラリネットを演奏してみたい」。マジック部に所属する子から「子どもたちに披露したい」。何もできなけれど、ラクビー部だったので力仕事は任せて下さい。今回のボランティア活動へそれぞれの想いが伝わってきました。

東京から7時間半のバス移動を終え、まずは日和山公園、石巻漁港へ行き、東日本大震災の姿を自分の目で肌で感じることにしました。「想像以上の光景に涙しか出ませんでした」「自分たちが何かをしたい」ということはおこがましいのかもしれないと、夜の振り返りの時間に語っていました。

2日目、清泉女子大学学生YMCAの2人も合流し、石巻の仮設住宅に住んでいる方、近隣の小学校、団地の方を対象に「わいわい広場」という緑日を実施しました。焼きそば、綿あめ、ポップコーンの軽食コーナー、クッキー作り・スライム作りの体験コーナー、ミサンカ作り、スクラッチア



## 石巻通信 vol.8

YMCA石巻支援センター  
伊藤 剛士

石巻支援センターでアリーダーとして参加しなりました。

は、12月22日(土)に、てくれたことです。今回、このように中学生子どもクリスマス会を行が初めてのボランティア生がボランティアとしていました。センター近隣活動参加という子もいまプログラムに参加しての児童・園児30人ほどが活動参加という活動は、被災地の参加、ゲーム大会やケータ的に楽しみながらプログラ少年リーダシップ育成キ作りを行い、共にクリラムを担ってくれたという新たな一歩でした。また、クリスマス会スマスをお祝いし、とても喜ばしいこと

クリスマス会では2つ 震災直後は泥かき、清ラムには、石巻・仙台のの嬉しいことがありまし掃作業から始まった石巻大学生をはじめとした青年た。1つは夏休みの学習での活動は、時間の経過年たちがリーダとして支援やプールプログラムとともに、被災者(仮設活動に参加してくれました)に参加してくれた児童が住宅居住者など)の心身た。

多く来てくれたことでのケアとコミュニティー 青年ボランティアは、一緒に遊んだリーダ再生、そして子ども達の単なるお手伝いさんでは1に会うのを楽しみにし居場所づくり(教育支援なく、彼ら自身がボランティアという声があちらこちら、今では他県からのボは青少年をエンパワーメントする場として、今つ目は、この夏休みに行ってきた支援活動を、地元後、より多くの地元の青わかれたリーダ基金青少年の住民の手にシフトさせ、被災地の自立とリーよう、励んでいきたいと年国際交流プログラムにせ、被災地の自立とリーよう、励んでいきたいと参加してくれた市内の中ターシップをサポーター 思います。

学生たちが、ボランティアの動きも見られるように

12月15日(日)午後、ミーティングを持ち、3日間を丁寧振り返りました。その中で「またみんなと石巻へ行きたい」と想いを確認し、今年の夏にも一度石巻へ行くために、今後、街頭募金活動などを行う予定です。本日の意味の「プロジェクト」が始まりました。

(I・I・y 出沼一弥)